

2022/03/03

令和3年度新潟建築賞設計コンペ 講評

審査員長 手塚貴晴+手塚由比

オヤジの勝利

皆さん真面目である。きちんと全部描き込まれた図面をたくさん送って頂いた。しかし、大多数を普通の家が占めていたのは残念であった。これは実施コンペではない。アイデアコンペである。だからユニットバスや玄関のタイル目地は要らない。家型である必要はない。基礎形状は説明してもらわなくともわかっている。欲しいのは夢である。どうやって狭さを喜んで使うか。その機微を狙っている。

大賞の堀井博氏による「Green Pot」は、酒肴に満ちていた。唯一と言っても良い。正直なところ、堀井氏のようなプロに賞を渡したくはなかった。しかし緑越しに設らえたサウナという仕組みは、オヤジの心をくすぐり、他の追随を許さなかった。ビールが美味い空間である。これは歳の功というのか。やはり人生を長く生きないと、出来事の面白みは理解できないのだろう。しかも子育て後の一人暮らしを夢想している。危険な香りがする。この案は奥さんに見せない方が良い。建築はその物質そのものが目的ではない。学生は建築家と称する有名建築家の作品をみて、そのプロポーションの巧みさに騙される。実は建物は少々カッコ悪くても良いのだ。飲み屋に行く時カッコ良い場所を選ぶだろうか。否！ 選ばれるのは楽しく意表を突く仕掛けである。学生は愉しさというものを好奇心をもって一生懸命学んで欲しい。さもないと百戦錬磨のオジさんを出し抜くことはできない。審査員長としては実に残念である。大賞は学生にあげたかった。

優秀賞の眞壁澄香氏による「米・食・住」は、なんと言っても脱穀され胚芽がとれたあとの米の形が良かった。米の凹みにトップライトが嵌っている。色は当然、米の白である。馬鹿馬鹿しいと思わないで頂きたい。この一途な思いこそがこの世を動かす原動力なのだ。シンプルな断面に、事細かに生活が詰まっている。薪割りの場所があったり、雪室があったり盛り沢山である。しかし大賞との違いは、蛇足が多いところ。住みやすさを追求するあまり、生活感が強すぎて頼みにくかった。不便益というものがある。少々何か足りずとも、良い生活はある。そこを追求して欲しかった。まだ若い者たちには無理な要求かもしれないが。

同じく優秀賞の本保拓造氏の「寄りあえる住まい」は、驚くほど無自覚なプレゼンター

ションであった。素晴らしい案である。ところがその良さに本人が全く気がついていない。窓の高さや形、そこに付随するであろう出来事の可能性に満ち満ちている。窓の角が丸いところも、レトロモダンな独自性を醸し出している。傾いている壁も異形な美学を作り出している。指導の先生とよく話して、どこが良くてどこが余計であるのか理解してほしい。

入賞した藤本大賀氏による「シトミノイエ」は、メッセージのシンプルさが良い。ただし、蔀戸を使うのなら、そこを徹底的に突き詰めてほしかった。蔀戸は軽く開けやすくなければならない。木材の特定の工法を採用しているが、工法は建築の目的ではない。手段の一つである。同じく入賞の坂本拓未氏による「ふたリスミカ～祖父母に合った暮らし方の提案～」は、日本独特の丁寧な中間領域を紐解いた作品である。平面図の随所に工夫が観られる。沖縄に見られる雨端の空間に似た風を呼び込むであろう。ただし独自性が見受けにくかった。敢えて独自性を出さないようにしたとのことであるが、それならば君に人は仕事を頼まない。予想を超えた答えを出すのがプロである。言われたとおりに作るだけであれば、設計のプロは要らない。独自性はエゴではない。使い手のベクトルに合わせた建築家の意志は強力な利益を生む。

コンペに出す時にはテクニックがある。メッセージである。特にアイデアコンペはそれが全てと言って良い。学校では学べない。街を歩き、野や山を駆け回り、好奇心をもってこの世の面白みを見つけてほしい。ネタはどこにでも転がっている。アイデアは机の前では生まれない。図書館の本にも書かれていない。大切なのはそれを看破する眼である。